

## マイネッケのランケ批判

上原專祿

八十三歳の高齢で、第二次世界大戦の悲劇的終末を迎えたフリードリッヒ・マイネッケ（一八六二—一九五四年）は、その翌年、ヒットラー主義にたいする假借のない歴史的・政治的批判を内容とした『ドイツの崩壊』(Die deutsche Katastrophe-Betrachtungen und Erinnerungen, 1946, 矢田俊隆譯『ドイツの悲劇』、昭和二十六年)を公表して、その健在を實證した。この小著が讀者の心を打ったのは、ドイツとドイツ民族を悲惨な政治的破局へと導いた政治的指導者たちへの著者のけげしいかりやなげきだけではなく、ドイツとドイツ民族のために新しい未来を築き上げようとするその熱情と期待であつた、と思う。この小著においてマイネッケが、ドイツ民族の再興への

マイネッケのランケ批判

道として、『民族としてのわれわれの任務は、今や人間性の目標をかかげて、われわれの心的生活の純化と深化にたずさわることでしかありえない』(矢田譯、一六〇頁)、深化の行わるべき二領域として宗教と文化をかかげ、特に文化の領域における深化の手がかりとしてゲーテへの復歸を勸告するのを讀んだとき、人々はマイネッケのオプティミズムをいぶかるというよりは、むしろこの老歴史家における永遠に若々しい情熱と不屈の意欲に驚いたことだろう。それにもかかわらず、『ドイツの崩壊』が救いを信じうるオプティミストの自己告白であつたことには變りはない。

しかしながらマイネッケは、もとより素朴なオプティミストであつたのではない。かれは、『ドイツの崩壊』の出版後、ベルリンのドイツ學士院で行つた講演『ランケ

とブルクハルト』(Ranke und Burchardt. Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Vorträge und Schriften. Heft 27. 1948)に於いて、かれ自身が研究と思索の長い生涯を通じて『歴史學の最大の教師』として仰いできたレオポルド・フォン・ランケにたいしてきびしい批判を加えると同時に、ランケとの對比においてヤコブ・ブルクハルトを高く評價し、その批判と評價を介していわばベシミストとしての自己の一面を告白しているのである。すなわち、この講演においてマイネッケは次に自己の所信を述べている。

『ランケは、私にとっては、私が研究をはじめたからというものは、一つの導きの星であり、北斗星であった。ブルクハルトは、後になってから、私に輝きはじめた、……』

しかしながら、今日、われわれはこう問いはじめている。われわれにとっても、われわれの後で歴史を研究するものにとっても、ブルクハルトが結局ランケよりも重要になるのではあるまいか、と。

この疑問が何を意味しているかを、あなた方は豫感し

ていられるだろう。自分自身の時代とその時代の運命とを歴史的に觀察し且つ共に體驗してゆけば、歴史家の精神の中に一つの分離できない内的統一というものができ上がり、その内的統一が、實りをあたえると同時に限界をつけ、促進すると同時に制御するという仕方である。われわれがこの歴史像を形成してゆくものである。われわれがこの十四年間に體驗したところのものは、われわれ自身の歴史的過去にたいする全く新しい觀點と問題とを、われわれに押しつけてくる。われわれは幾重にも學び直さねばならないのだが、新しく體驗されたものの一時の形勢や感情的な印象に屈しないように警戒しなければならぬ。しかしながら、あらゆる用心を拂ってなお且つこういえるだろう。ブルクハルトは自分自身の時代の歴史的本質をランケよりもより深くより鋭く洞見した、だからブルクハルトは來らんとするものをも、ランケよりもより明確に、より確定に豫見できた、と』(『ランケとブルクハルト』、三一―四頁)。

ここでマイネッケが、『十九世紀がドイツ文化民族の内  
部でつくり出した二人の最大の歴史思想家』(前掲書、三

頁)のうち、ブルクハルトの方が自分自身の時代の歴史的本質をランケよりもより深くより鋭く洞見したと述べているのは、世界史の経過についてブルクハルトがベシミストであったのにたいして、ランケはオプティミストであった、というにひとしいだろう。事實、マイネッケはこう語っている。『かれ(ブルクハルト)の根深いベシミズム——それは、かれ自身の告白によれば、もう若い頃からあらゆる現世のもののはかなさをかれに思い起させたものであるが——は、ランケが望み且つ信じながら心にいだいていたような、世界史の規則的發展についての理想像のようなものに立ちいたらせなかつた。いや、ランケが不規則的なものと感じたものが、かれにとっては、ヨーロッパの運命が十九・二十世紀において成就されてゆくときの暗い規則となつたのである。なぜなら、かれは、ヨーロッパにとつていまわしい野蠻の時代が避けがたい必然性でやってくるのを見たからである』(前掲書、七頁)。いずれにしてもマイネッケは、こうしたベシミストとしてのブルクハルトへの親近感を表明することによって(前掲書、七頁)、かれ自身もまた一人の

#### マイネッケのランケ批判

ベシミストであることを告白したように見える。

ところで、自分自身を一人のベシミストとして告白することを含意するマイネッケのランケ批判——同時に、ブルクハルト評價——は、晩年のマイネッケの精神情況における何を物語り、その學問志向や研究方法における何を示唆するものだろうか。いったい、マイネッケのオプティミズムとベシミズムとは、それぞれどういう性格のものであるのか。また、兩者はどう關連し合っているのか。こうした問題について考えるためには、問題の出発点となつた講演『ランケとブルクハルト』のうち、今まで論及されなかつた他の部分について考察を進める必要があるのはいうまでもない。しかしながら、それだけでは、なお足りないだろう。われわれは、第二次世界大戦以前に書かれたマイネッケの諸論著のいくつかにもさかのぼって、そこでマイネッケが少くともランケをどう見ているかを觀察しなければならぬだろう。

## 二

マイネッケはランケに關するモノグラフィイを書かな

かったけれども、思索と研究の諸時期にわたって、ランケについて考察した論文、またはランケに論及した著述はさすがにすくなくない。それらの諸論著におけるランケ観の内容とその展開について概観してみよう。

マイネッケがランケについて試みた最初のまとまった考察は、おそらくは、一九〇八年に初版の出た『世界市民主義と民族國家』(Weltungertum und Nationalstaat. Studien zur Genesis des deutschen Nationalstaates, 1908) の第一篇第十一章『ランケとブスマン』(Ranke und Bismark. a. a. O. 6. Aufl. S. 287—328) であろう。『世界市民主義と民族國家』は二篇から成っている。その第一篇は、七年戦争以来の——特に十八世紀の九十年代以来の——ドイツ民族國家の思想の發展を、代表的思想家とマイネッケが判断した諸人物の思想について探ろうとする政治思想史的研究であり、第一篇は、十九世紀中葉とそれ以後におけるプロイセン民族國家の問題をめぐる政治現實を明かにしようとする政治史的研究である、といえよう。ランケが『世界市民主義と民族國家』で取り上げられたのは、ドイツ民族國家の思

想の形成と發展を代表的思想家について探求しようとする第一篇の意圖にかかわってのことであり、ここでランケについて述べられているのは、主として政治思想家としての一面についてである。したがって、ランケの全著述のうち、ここでは、ランケが主宰した『歴史、政治雜誌』(Historisch-politische Zeitschrift, 1832—1836) に載せられた諸論文——殊に『フランスとドイツ』(Frankreich und Deutschland, 1832)、『ドイツの分立と統一の試み』(Ueber die Trennung und die Einheit von Deutschland, 1832)、『強國論』(die grossen Mächte, 1833)、『政治問答』(Politisches Gespräch, 1836)——だけが、主として取り上げられている。これらの諸論文において、ランケは民族と國家との關係をどう考えていたか、またランケはこの二つのものをどう意味づけていたか、それらの問題点を究明すると同時に、その究明を介してドイツ民族國家という思想の形成におけるランケの位置と意義を論定することが、マイネッケの當面の課題であったのである。

このような課題を當面の研究課題としたマイネッケ

は、ランケのうちに、『眞の獨創性、本源的な感覺、模倣のできないいぶき』をもって發言するところの、一人の天才的な政治思想家を見出した（『世界市民主義と民族國家』、二八八頁）。

まずマイネッケは、ランケにおけるドイツ民族意識について検討する。そこでマイネッケの理解したところによれば、『ランケのドイツ民族感情は、何よりも精神的性格のものであつて、政治的性格のものではなく、インスピレーションの感情であり、全面的に滲透され且つ擔われているという感情であり、……かれの精神と民族のそれとの汎神論的關係の感情である』（前掲書、二九〇頁）。少くともこれが、『政治問答』でランケが、『きわめて微賤なものをも、きわめて高貴なものと同様に充たしているところの隠秘なあるもの、われわれが吐き出し、吸い入れるこの精神的空氣』（ランケ全集、四九—五〇卷、三二六頁）と呼んだものについての、マイネッケの理解の仕方である。したがつて、マイネッケによれば、ランケの民族意識は、本來、十八世紀末葉から更にさかのぼった『古風で、植物的な民族形成の時期』における意識のか

マイネッケのランケ批判

たちの反映である。しかしながら、ランケにおけるドイツ民族意識はただそれだけのものではなく、フンボルト、フィヒテ、シラー、初期ロマンティカーによって代表される『ドイツ民族理念の普遍主義的時期』におけるドイツ民族意識のかたちをも同時に寫し出している、とマイネッケは考えた（『世界市民主義と民族國家』、二九一—二九三頁）。ところで、もしもランケのドイツ民族意識が、先行する二つの時期におけるドイツ民族意識のかたちを同時に反映しているだけのものだとするならば、ランケの考え方のどこに『眞の獨創性』があるといえるのだろうか。マイネッケは、ランケが、ノブリースのように、民族的なものを直ちに普遍化し、「ロマン化」する代わりに、現實というものにたいして正當の權利を附與した點に、『精神情趣の大きい急回轉』（前掲書、二九四頁）を見しうる、と考えた。『感情を越えて直ちに事實的なものへと迫つてゆくところの、現實主義的で現世をよるこびとする汎神論』——これが、ランケの汎神論的なドイツ民族精神觀に與えた、マイネッケの規定である（前掲書、二九五頁）。

このように、ドイツ民族意識の形成と發展におけるランケの獨自的地位を検出したマイネッケは、ついで、民族と國家の關係についてのランケの表象、「保守的ドイツ民族國家思想」と呼ばれているランケの國家觀、それらがドイツ民族國家思想の形成において占める位置と意識を論定しようとする。ここでマイネッケは、あらためて、「現實的なもの」と「精神的なもの」とを不可分離のものとする。ランケの思想の仕方を重視し、ランケの國家觀がその思考方法に基づくことよって新しい特徴をえたことを指摘する。マイネッケによれば、ランケはまず汎神論的立場に立って、總じて國家というものを人間的存在の一つの「變容」と見るだけではなく、民族的存在の一つの「變容」と見て、國家にたいする民族の重要性を強調する。しかしながら、マイネッケの見るところによれば、『かれ(ランケ)はドイツ民族の大きい政治的任務を、ドイツの個々の國家をできるだけ獨自にドイツ的なものとして形成してゆくこと、できるだけ一切の他國の型や理論にわずらわされることなしに形成してゆくこと、のうちに洞見した』(前掲書、二九七頁)。ドイツ民族

のいわば文化的一體性の上に、ドイツの政治的統一を打ちたてること、それはランケの志向に遠いものであった。ランケにとつては、一つ一つの王侯國が問題だったのである。なぜなら一つ、一つの王侯國こそ、現實的なものに他ならぬから。しかも一つ一つの王侯國は、ドイツ的なものとして形成されてゆかねばならず、他國の型や理論——なかんずく、議會主義や人民主權の理論——にわずらわされてはならない。そうした型や理論は「一般的なもの」に過ぎず、「民族的なもの」ではないから。こう、マイネッケは、民族と國家の關係に關するランケの見解についていおうとした、と考えてよからう(前掲書、二九五—二九八頁)。

もとよりマイネッケは、ランケが民族の國家形成力を説いている點だけに注意を拂つたのではない。かれは、ランケが逆に國家の民族形成力を説き、國家の中で働き且つ國家から放出されるところの「道德エネルギー」について強調している點にも——いや、まさしくその點に——深く注目する。すなわち、マイネッケの見るところによれば、ランケは國家を『隱秘なあるもの』として

の民族からの表出と考えた。しかも國家は、民族の側から規定されるだけのものではなく、自己規定を行うところの——しかしながら、民族がそこで精神的・道德的に共働するところの——一つの人格である(前掲書、二九八—二九九頁)。したがって、『權力國家に他ならぬところの諸國家、軍隊と貨幣だけに依存している諸國家を、ランケは民族國家と見なさないのである』(前掲書、三〇〇頁)。かくて國家というものは、『自發的で、独自の生活から發生した個性』と考えらるべきものである(同上)。しかも、一つの人格、一つの個性としての國家の權力は、恣意的使用のためや存在をつなぐために與えられているのではなく、人間精神に新しい表現を與えるために與えられているのである。それは、ランケの言葉によれば、『神からの委託』なのである(前掲書、三〇一頁)。

ランケの民族觀を検討し、轉じてその國家觀の特徴を追求してきたマイネッケは、ここにわれわれが見るように、いわば期せずして、ランケの國家觀における權力と倫理との關係の問題に觸れるようになった。それでは、マイネッケは、この問題點において、ランケの國家觀に

マイネッケのランケ批判

たいしていっそう立ち入った分析を試みただろうか。後年のマイネッケならば、おそらくは、そうした作業に込んだことだろう。しかしながら、ドイツ民族國家思想の歴史的形成の足どりをひたむきに辿ることを當面の課題としていた當時のマイネッケは、後年かれの問題意識の中核を占めるにいたったこの問題に深くは立ち入らなかった。その代わりにかれは、ランケの國家觀において、『大きい對立』とマイネッケの見た別の關係が、どう消化され、どう措置されているか、を考察した。ここにマイネッケが『大きい對立』と呼んだものは(前掲書、三〇二頁)、普遍的・客觀的なものと個性的・主體的なもの、理念的なものと經驗的・事實的なもの、それらの關係に他ならない。そして、この『大きい對立』の消化の仕方として、ランケは、ヘーゲルが普遍的なものの中に經驗的なものを解消したのに反して、兩者にそれぞれの權利を認めることによって、經驗の世界を解放すると同時に、普遍的なものをただ豫感しうるものと措定することによって、普遍的・思辨的意味づけの企てを遠方へ押しやったのである、とマイネッケは見た(前掲書、三〇二

頁。

ところでマイネッケは、ランケの國家觀の思想構造をこのように分析することをもって満足しないで、『ランケの觀念の歴史的意義と偉大さ』(前掲書、三〇五頁)について評價しようとする。かくて、ランケの偉大さは、マイネッケの評價によれば、『國家人格の淵源は下降して深み(民族)に達し、その目標は上昇して普通の諸力がはたらいっている高みに達するものだが、生きてある日の明かな光りのうちに、自己の最も個有な要求に應じる限りでの普遍的諸理念に従う』(前掲書、三〇六頁)ような民族國家の理念を提示したこと、そして『普遍的原理にではなく、再生した民族國家の自律性にこそ、未來が屬する』(三〇七頁)。ことを豫言したこと、かくて『歴史家が、來らんとするものを深く洞見した豫言者になった』(同上)こと、それらのうちに存する。(この最後の評價が、『ランケとブルクハルト』では、ブルクハルトについてなされてゐることは、すでにわれわれが前に見た通りである)。もとよりマイネッケは、ランケの偉大さについて語るだけではなく、その弱みについても述べることをはば

からない。ランケが民族國家というものを全ドイツ民族について要求するにいたらなかったのは、觀照する歴史家として當然のことではあるが、そのために、ドイツにおいて民族國家的結合へと押し迫っていった力を過小評價したことは、マイネッケの眼には、ランケの弱みであった。そして、ドイツ精神によって培われた個々の國家というもので満足したランケの保守的的民族國家思想は、事實としてのドイツの分裂事態の反映であると同時に、それを理由づけようとする試みでもあった。しかしながら、精神的一體性の意識からドイツ民族性の政治的表現へと發展する過程で、個々の國家の境界で一度停止したのは、ドイツ民族感情の發展における最も現實的な事實であったし、それには理由もあつた。もしも個々の國家の民族性というものに適當の考慮が拂われなかったとすれば、最も根深い感情を否定したことになるをえなかつただろう。マイネッケは、このようにランケを辯護する(前掲書、三〇七—三〇八頁)。

ところで、マイネッケは、ドイツ民族國家思想の形成と發展の過程におけるランケの位置を、結局、どう論定



したであろうか。理念から出發することが最も多かった政治家としてのフンボルトと現實から出發することが最も多かった政治家としてのビスマルク、『この兩者の間に——世代からいっても——ランケが立っていた、そのカリスマは、他の誰れにもまして、諸理念と諸現實とを結合する、ということであった』(前掲書、三〇八頁)。これがマイネッケの、ランケに與えた位置というものである。

以上、觀察してきたように、マイネッケは『世界市民主義と民族國家』において、ランケをドイツ民族國家思想の發展史上における一人の最も獨創的な政治思想家として取り扱い、且つそのように評價した。その際、暗黙のうちには評價と基準とされたものをわれわれは見逃すべきではないだろう。その基準とは、マイネッケ自身が「價値」と信じていたところの、「文化民族」としてのドイツ民族が統一された一體的な「國家民族」であることを要請する、ドイツ民族國家思想そのものに他ならないだろう。このような國家思想の形成にどういふ仕方かどうか、これマイネッケがランケを——そして他の思想家たちを——この書で評價したときの判断基準で

マイネッケのランケ批判

あった、と見てよからう。この基準に照らし合わせた場合、相互に近似した意義をもつと想定された思想家たち、內的に親近性があると判断された思想家たちをこの書と同じ章で取り扱うことは、マイネッケにとっては決して不自然でないばかりか、むしろ一つの必然であった、といえよう。ランケを取り扱ったその同じ章で、マイネッケが、一見奇異な取り合わせではあるが、現實政治家ビスマルクを取り扱ったのは、こうした事情に基づく、と考えてよい。

思うに、ランケとビスマルクとの「內的親近性」についてのマイネッケの想定は、かれ自身の發見に基づくといふよりも、むしろマックス・レントツの研究『ビスマルクとランケ』(Max Lenz, Bismarck und Ranke. Kleine histor. Schriften, S. 383 ff.)に由来するものかも知れない(『世界市民主義と民族國家』三〇八頁、註二)。いずれにしてもマイネッケが、ランケとビスマルクとを同列に置いたのは、ドイツ民族國家思想形成過程において、二人ながら、『空虚なマスクの廢棄、硬直したドグマや理想の克服』に貢献したと考えられたからに他ならない

(前掲書、三〇九頁)。こうした價值視點と判断基準に立って、ランケとビスマルクとを評價しようとする意圖する限り、兩者の異質性よりも、むしろその親近性が注意されるのは當然だといえよう。そうして、このような價值視點からは、國家活動における權力と倫理との對立と鬭争、その矛盾と相剋の問題が問題となる餘地はなかつただろう。『世界市民主義と民族國家』に關する限り、この問題についてマイネッケは、オプティミストでもなければ、ペシミストでもなく、いわば問題以前における無關心状態にあった、というべきではあるまいか。この問題がマイネッケにとって切實な問題になつたのは、『國家理性の理念』(Die Idee der Staatsräson, 1924)においてであることはいふまでもない、しかしながら、その書におけるマイネッケのランケ觀を觀察する前に、われわれはなお一二の小論篇について同様のことを行ねばなるまい。

## 三

『世界市民主義と民族國家』において、ドイツ民族國

家思想の形成過程を、代表的思想家と判断された人たちの思想について跡づけ、ランケとビスマルクとを「内的親近性」をもつものとして同一の章で評價したマイネッケの取り扱いは、ドイツ學界において、必ずしも全幅的同意をかちえなかつたように見える。現に、オットー・ディテルは一九一一年に出版された『政治家としてのレオポルド・フォン・ランケ』(Otto Diether, Leopold von Ranke als Politiker. Historisch-psychologische Studie über das Verhältnis des reinen Historikers zur praktischen Politik, 1911)の序文において、マイネッケがランケとビスマルクとを「精神的同僚」と見なしたのにたいして意識的に反對し、兩者をむしろ「對蹠者」と考へべきだ、という見解を提示した。マイネッケはこのような反對意見を含むディテルのランケ研究に批判を加えると同時に、『世界市民主義と民族國家』における自分自身のランケ研究について、方法と内容の両面にわたって、補説することを必要と考へたらしい。最初(一九一三年)、『歴史雜誌』の第一一一卷に載せられた『ランケ批判のために』が、そのために書かれた論文である

(Zur Beurteilung Rankes, Historische Zeitschrift, Bd. 111, 1913. この論文は、一九一八年に出版された論文集『プロイエントキイン』(Preussen und Deutschland im 19. und 20. Jahrhundert, 1918, S. 361 ff. に再録されているが、第二次世界大戦後に出された論文集『創造する鏡』Schaffenden Spiegel, Studien zur deutschen Geschichtsschreibung und Geschichtsauffassung, 1948, S. 121 ff. に、三度、収録されている。これで見ると、この小論は、晩年になっても、マイネッケの氣に入っていた論文の一つであつたらしい。)

ディテルは前掲のランケ研究の序文で、ランケとビスマルクとを對比して、こう述べている。『ひとり(ランケ)が、その政治的意欲を純然たる認識熱情の諸要求から導き出し、且つその諸要求に擔わせたのに、他のもの(ビスマルク)の場合には、まさしく反對に、巨人的な政治的熱情というものが、その歴史的・政治的洞察の性質と範圍を規定した』(マイネッケ、『創造する鏡』、一二四頁所引)。ところで、こうしたディテルの見解にたいしてマイネッケは、『世界市民主義と民族國家』で採られた方法と問題視點の意味を説明することによって、ランケ

マイネッケのランケ批判

とビスマルクがやはり「精神的同僚」であるゆえんを力説しただろう、と想像されるかも知れない。しかしながら、マイネッケが『ランケ批判のために』において事實を行ったところは、むしろこの想像に反するような印象を興える。なるほどマイネッケは、『世界市民主義と民族國家』の研究意圖や研究方法が、大衆の動き、感情や意欲の力、潜在意識というような要素を方法上重視しようとするディテルによって、誤解されていることを指摘してはいる(前掲書、一二四頁以下)。すなわち、マイネッケは、指導的な個々の思想家における「諸理念の探求」という方法を介して、民族的國家意志の安全な自己規定ほど高まってゆき、それへと結果してゆく政治的・民族的エネルギーの自己強化の全動向を敘述したという意圖が、まさしくその方法によって實現できる、とかれの考えた理由についても説明してはいる。そして、民族の精神的淨化、その最も有力な代表、その實際的實現において、『フィヒテやロマンティカーが解放戦争の時代において、また、ヘーゲルやランケやビスマルクが思辨から

現實主義への過渡期において、ドイツ人の政治的・民族的理想の内容にたいしても寄與したところのものは、實に強大であった」と述べてもいる（前掲書、二二七—二二八頁）。しかしながら、マイネッケは、この小論では、この箇所以外にランケとビスマルクの名を併記したことはなく、いわんや兩者の「内的親近性」について、直接的に論じたことはなかった、といつてよい。

それではマイネッケは、この小論にいたって、ランケとビスマルクとの「内的親近性」の觀念を放棄したのだろうか。いや、けつしてそうではない。マイネッケは、ディテルの『政治家としてのランケ』を——殊に前に掲げたディテルの見解を——媒介として、この小論では、「歴史家としてのランケ」の精神相貌を浮き彫りにし、迂回的な仕方と間接的な論述方法とによって、しかしながら『世界市民主義と民族國家』の場合よりも、一段深い問題次元において、ランケとビスマルクとの「内的親近性」の觀念を再提示している、と見られる（前掲書、二九—一四〇頁）。すなわちマイネッケは、歴史家ランケが政治的熱情をもたず、純然たる認識衝動をもっていた

というディテルの言葉を肯定しながらも、そうしてランケの觀照的精神を「理知主義的な十八世紀」の影響だけに歸するディテルの見解を強力に否定する。そしてマイネッケは、一方でランケの觀照的精神が素質的なものであることを示唆すると同時に、他方では、それが、ディテルの名づけた「十八世紀の理知主義」と「十九世紀の意志主義」との過渡期という地盤においてのみ理解されるべきものであることを主張する。しかも本來的な純粹觀照的であるところのランケが「道德的エネルギー」のごとき非合理的・意志的なものを歴史のうちに探求し且つ記述したこと、そして諸強國や諸國家人格の意志生活を空前の觀照にまでもたらしたことによって、近代意志主義的精神の最大の指導者と開拓者の一人になったことに、マイネッケは注意を喚起する。かくて、最後に、この段の議論を次のような言葉で結ぶ、『……かれ（ランケ）は——ここで私の著書（『世界市民主義と民族國家』）の論述に注意を促してもよいだろう——左右のイデオロギー的獨斷論に反對して、かれの歴史觀察の上で、無條件的な國家の自己規定という思想と現實主義的權力

政策の思想とを再び榮譽の座にもちきたすことによつて、かれはあの靜穩な時代（復古時代）の限界を突き破った』（前掲書、一四〇頁）。これらの論述と表現の底に、ランケとビスマルクとの「内的親近性」についてのマイネッケの見解が、一段深められたかたちで横たわっていることを、われわれは見逃しえないだろう。

一九一三年に發表された『ランケ批判のために』よりも、いっそう端的にランケとビスマルクとの内的關連性が言い現わされているだけではなく、「オブテイミズム」という明瞭な刻印の下に、ランケの歴史及び政治思想が語られているのは、第一次世界大戦のさ中にマイネッケがインゼル叢書の一つ（Insel-Bücherei Nr. 200）に加えたランケの『強國論』の序文であろう。この序文は『一九一六年八月、ベルリン』と日付けされている。マイネッケは、第一次世界大戦が勃發すると、單に「觀照する者」としてではなく、「共に體驗する者」として、いや、「共に闘う者」として、多數の論説を書き、多數の講演を行った。その論調の推移と展開を、戦局と政治情勢のそれと關連させながら、たとえば『一九一四年のドイ

マイネッケのランケ批判

ツの奮起』（die deutsche Erhebung von 1914, 1914）『世界戦争の諸問題』（Probleme des Weltkrieges, 1917）、『十九・及び二十世紀のホイエンとドイッ』（Preussen und Deutschland im 19. und 20. Jahrhundert, 1918）第五類などの論集に収録されている諸論篇についてたどることは、われわれの研究題目にとつても實は缺くことのできぬ操作だろう。なぜなら、そうした操作を通じて、「力」を基底とした現實政治というものにたいするマイネッケの評價の仕方と内容、それらの變遷を明かにすることができるところである。ところで、インゼル叢書所収『ランケ強國論』の『序文』は、第一次大戦中に書かれた前記の諸論説に伍する意味と内容を備えていると同時に、この古典を永遠の古典として定位させたい、という意圖をももっている。

こうした『序文』において、特にビスマルクとの内的關連を強調しつつ、ランケを語っている點に、われわれは注意を拂わねばなるまい。マイネッケはこう記している。『ランケは、その當時の自由主義やその當時の保守主義の國家觀が内包している眞理内容を否認しよう、と

考えたのではない。ただそれらが獨裁權を要求することにかれは反對しなかったのである。かれはかれらに、國家というものは學者の空理空論にしたがって作られるものではなく、現實の諸力によって作られるものだということ、だから正常國家などというものは存在しないということ、そうでなくてどの國家も個有の諸法則と諸要求に基づいて發展するところの、生きた獨自の個的實在であるということ、それらのことを示そうと欲した。近代の歴史的現實主義のこのプログラムはその當時ただ少數のものだけに理解された。しかしながら、そのプログラムはビスマルクによって實行に移された。そして、それはランケによって一切の眞實の歴史的思考の基礎となり、ビルマルクによって一切のとらわれない政治的思考の基礎となった』(『序文』、四頁)。

ランケとビスマルクとの内的關連については、あたかも「權力」の意義の問題をめぐって、更にこう説かれている。『ランケの論説(『強國論』)は、ゲーテとビスマルクの名によって表示されるところの、われわれの近代の民族生活における二つの大きい時代について、その眞の

關係を明かにするものであり、且つ兩者の有機的連鎖をなすものである。それは、諸民族の生活において精神的價值というものは權力價值なしには作り出されるものではなく、また永續する權力價值は精神的價值なしには作り出されるものではないということ、そしてランケとともにいえば、兩者は「最も嚴密な仕方、一緒に一つ一つの全體をなしている」ことを示している。一つ一つの國家の權力政策は、このスケッチ(『強國論』)では、諸民族の精神的諸力に輝きわたっているものとして立ち現われている』(前掲書、五頁)。ここにランケは、『精神的價值』と「權力價值」とのいわば必然的調和、いや、調和以上の兩者の相互規定的一體性というべきものの教示者兼記述者として指摘されている。ところでそれは、權力の問題についてランケがオプティミストである、と述べられたに等しい、と考うべきであらうか。いや、必ずしもそうではない。「權力」と「精神」との調和の可能性に疑惑をもつ、そのような問題意識にかけてランケをオプティミストとして指定することが、マイネッケの指摘の意味ではなく、むしろランケとともに、兩者の必

然的調和と相互規定的一體性への素朴な信條を表明することが、指摘の意味だ、と考えられねばなるまい。

それだけに、マイネッケがこの『序文』で、別の問題点にかけて、ランケをオブティミストと刻印づけていることに、われわれは特に興味を覚えざるをえない。マイネッケは、『強國論』の内包する見解や示唆の限りなく豊かであることに讀者の注意を喚起した後で、こう述べている。『諸國民をばらばらに引き裂こうとおびやかしている今日の世界情況においても、かれ（ランケ）の素晴らししオブティミズムがわれわれを慰めてくれる。そのオブティミズムは、「法の體系」というものが諸事物のヨーロッパ的秩序の中でいつも繰りかえして立ち現われ、そしていつも新しい完成へと努力しているのを見た。このオブティミズムは、権力をめぐって相互の間に行われる鬭争にもかかわらず、ヨーロッパの全體生活をその根底で擔っているところの、強力な切石や礎石についての深い知識に、由来したものである』（前掲書、八頁）。當時（一九一六年八月）のマイネッケにとっては、「権力」と「精神」との内的調和が、それとも無限の對立か、が問

マイネッケのランケ批判

題であつたのではなく、ヨーロッパ世界の永遠の分裂か、それとも悠久なる一體性か、が問題であつた、と見られる。そして、この後の問題意識においてランケを仰ぎ見た場合に、マイネッケの眼には、ランケがまさしくオブティミストとして映じたわけである。

第一次世界大戰のさ中において、ドイツ民族國家の存在と個性、その獨立と擴大を志向するマイネッケの實踐的意欲の底流に、いつ、どうして、ヨーロッパ世界の一體性の永遠なる實現への願望が立ち現われてきたか、という問題に答えることは、われわれのさしあたつての任務ではないだろう。しかしながら、この願望が、おそらく一九一六年の初頭においてマイネッケをとらえていたであろうことを、われわれは、かれが一九一六年一月二十七日、ベルリンの學士院で行つた記念講演『ドイツの歴史觀の變遷におけるゲルマン精神とロマン精神』（Germanischer und romanischer Geist im Wandel der deutschen Geschichtsauffassung. の講演は、ベルリン學士院報告、『歴史雜誌』第一一五卷、『十九及び二十世紀のプロイセンとドイツ』に収録されているが、『創造する鏡』、一九四八年、

九四—二〇頁にも、四度目に載せられている)を通じて察知することができる。そしてこの講演においてあたかもランケが、ゲルマン諸民族とロマン諸民族との本來的一體性とその共同體的發展性とを確信していたものとして、したがってマイネッケの願望の實現を保障するものとして、特記されていることを、われわれは發見する(『創造する鏡』、一〇九—一七頁)。

\*

以上、『世界市民主義と民族國家』から『ランケ強國論、序文』にいたる諸論篇によつてうかがいえた限りのマイネッケのランケ觀、そこに現われているマイネッケのランケへの理解と評價、いや、單に理解と評價だけではなく、歴史・及び政治思想家としての、また歴史記述者としてのランケにたいするマイネッケの大きい信頼と深い尊敬、それらを心に刻んだ上で、あらためて、第二次世界大戰後、一九四八年になされた講演『ランケとブルクハルト』におけるマイネッケのランケ批判を讀むとすれば、誰れでも、一種の衝撃を感じることだろう。

そして、マイネッケの心情のうちに、價値の根本的轉換が行われ、問題意識の逆轉か、または少くともその異常な移動が行われたに違いない、という印象を受けるであろう。それと同時に、八十五歳の高齡をもつてしてなお且つ自己批判と自己脱皮を敢えて行おうとするものとして、老歴史家のいわば修道者の精進に驚異の念を禁じえないものもあるだろう。

しかしながら、こうした印象が正しいものであるかどうかを論定するためには、最初に記したように、講演『ランケとブルクハルト』の全體について検討を行わねばならないのである。この拙文では、その検討に立ち入るいとまはもうなくなっている。ここでは、すでにマイネッケ自身が、そのような印象をいまして、前に注目を拂つておこう。すなわちマイネッケは、前に引用したように、『あらゆる用心を拂つてなお且つこういえるだろう、ブルクハルトは自分自身の時代の歴史的本質をランケよりもより深くより鋭く洞見した、だからブルクハルトは來らんとするものをも、ランケよりもより明確に、より確實に豫見できた』と述べたが、しかも



その直ぐ後でこういい足している。『しかしながらそのために、二人の各々が過去數千年のヨーロッパの發展について作り上げた歴史像についてのわれわれの判断が、同様にブルクハルトに有利になるよう改められねばならぬだろうか。ここに、この疑問に答えようとする、われわれは一つの奇妙な結論、いってみれば一つの二律背反に達するだろう』(『ランケとブルクハルト』、四―五頁)。

マイネッケは、世界史構成の視點と方法に關して、ランケを捨て去って、ブルクハルトを擧ぐべきだ、と考えたのではない。かれは、兩者を二律背反として自覺しながら、窮極においてその意識的止揚を志向しているのである(前掲書、一九―二二頁)。そのような志向は、價値の根本的轉換を意味するものではないにしても、問題意識の深まりに照應した價値次元の高まりを意味することはたしかだろう。

ところで、マイネッケは、どうして、またどういふ經過で、ランケとブルクハルトとを同時に問題とする問題意識に到達したのだろうか。二人を二律背反として自覺した場合の、自覺の構造はいったいどのようなものだった

マイネッケのランケ批判

ただろうか。いわゆる二律背反の止揚の方法としてマイネッケの豫期しているものは、何なのだろうか。その止揚の方法は、結局、ランケの方法以外の何ものでもなかったのではあるまいか。それでは、ランケとマイネッケ自身との違いはどこに存するのだろうか。こうした一連の疑問に答えるためには、あの講演の検討だけでは、もとより足りないだろう。われわれは、そのためには、第一次世界大戦終了後、第二次世界大戦にいたる歴史的・政治的問題情況——それはマイネッケにとって深刻な問題でみたまされていた——の下で書かれたマイネッケの諸作品において、ランケがどう見られ、どう評價されているか、またランケとの關連においてすでにブルクハルトがどう理解されているかを、周到に吟味しなければならぬだろう。その場合に、一九二四年に出版された『國家理性の理念』(Die Idee der Staatsräson in der neuen Geschichte, 1924)の第三編第三章『ランケ』(同書、四六九―四八七頁)、同年新しくドゥンカー・フンブロット社から公刊されたランケの『政治問答』に寄せられたマイネッケの『序説』(この『序説』は、『歴史意識と歴史の

意味』 Von geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte, 1939 の第二論文として再録されている。最後に一九三六年出版された『歴史主義の成立』(Die Entstehung des Historismus, 2 Bde, 1936) 第二卷の附録『記念講演、レオポルド・フォン・ランケ』(Leopold v. Ranke,

Gedächtnisrede, 同書、六三二—六五〇頁) が特に綿密に吟味される必要がある。この拙文では、それら一切の吟味を他日にゆずらざるをえなかった。

—一九五四・八・二八—